A psychological study for supporting career choice (II) Subjective well-being and social comparison in job search activities

Yoshitsugu FUJISHIMA, Kanae Miura, Yutaka SHIMIZU, and Sachiko TAKAHASHI

The relationships between subjective well-being and social comparison in job search activities were investigated. Previous studies have suggested that comparison with similar others may influence one's subjective well-being. Female undergraduates (n = 89) participated in a longitudinal study from December 2004 to July 2005. Results indicated that there was a lower frequency of activities by participants themselves in comparison to the inferred frequencies of activities by similar others. The differences in proactive of undergraduates became smaller with time, whereas the differences in other activities remained constant. Subjective well-being in the early phase, but not in the latter phase, was negatively correlated with differences between participant's activities and similar other's activities. Discussion is focused on the implications of social comparison and its influence on subjective well-being.

Key words: career choice (キャリア選択), job-hunting (就職活動), subjective well-being (主観的幸福感), social comparison (社会的比較)

問題
キャリア選択支援研究のこれまで
生活心理学研究所共同研究プロジェクト「キャリア選択支援に向けた心理学的研究—自己認識およびメンタルヘルスに注目して—」（以下、キャリア選択支援研究）は、大学生のキャリア選択に対し、どのような方法が有効であるかを心理学的に研究することを目指している（三浦，2005）。その具体的な目標として、(1)キャリア選択場面の実態、心理学的問題の把握、(2)キャリア選択場面における意思決定過程およびその際の意志性に関連する心理過程ならびに個人差の同定、(3)キャリア選択における心理的効果的な介入手段の開発の3点があげられている。これまでに、第一次計画として、昭和女子大学心理学科学生を対象に2004年度から2005年度にかけて縦断調査を行った。結果の一部は、高橋・藤島・清水・三浦（2006）、高橋（2006）、藤島・三浦・清水・高橋（2007）で報告されている。

特に藤島ら（2007）は、就職内定につながる活動と主観的幸福感との関連を、社会認知的選択理論（Lent, Brown, & Hackett, 1994；安達, 2006）の観点から検討している。この研究では、大学主導型のキャリア選択活動が内定獲得には直接関与しない一方で、学生個人が主体的に行う活動においては促進的な影響がみられた。この理由として、主体的活動による目標達成行動進進効果と目標修正効果が指摘されている。主体的活動による成功経験は、目標達成行動を促進させると考えられる。その一方で、主体的活動における失敗経験は、実現的な認識をもたらすことで目標を（多くの場合は下方）修正させるとも考えられる。さらに、藤島ら（2007）は、進路支援センターへの相談が就職内定に促進的効果をもつことも見いだしている。これは、学生たちに対する道具的サポート（cf. 福岡, 2006）の有効性を示している。進路支援センターからの具体的な情報が、就職活動に対する現実的な認識と有効な方略の獲得に促進的影響をもたらしたものと考えられる。
しかしながら、藤島ら（2007）の分析では、これらのキャリア選択活動や進路支援センターへの相談と主観的幸福感との関連は全体的に見いだされていない。進路支援センターへの相談は道具的サポートであると考えられるため、主観的幸福感と直接関連しないのは理解可能である。他方、キャリア選択活動に関して、藤島ら（2007）は、全般的にストレスを感じやすい状況である可能性、周囲の他者との社会的比較（cf. Festinger, 1954）が影響しうる可能性の二つを指摘している。

社会的比較との関連

日常生活において頻繁に、我々は周囲の他者と自分自身を比較する。Festinger（1954）によると、人は自分自身の意見や能力を正確に評価したいと動機づけられており、物理的基準が存在しない場合、他者との比較を通じて自分を評価する。このとき選ばれる他者は、一般的に類似した他者であると考えられている。この意味において、周囲の他者がどのような就職活動を行っているかの推測は、学生自身の自己評価に影響すると考えられる。周囲の他者の方が自分よりも就職活動を積極的に行っていると考えた場合には、焦りや不安などを感じやすく、主観的幸福感が損なわれることがある。


その一方で、人は自己向上（self-improvement）のために社会的比較を行うかもしれない。この場合、自分よりも優れている他者との比較を行うと考えられる（Buunk, Collins, Taylor, Van Yperen, & Dakof, 1990; Gibbons, Blanton, Gerrard, Buunk, & Eggleston, 2000）。就職活動はキャリア選択においても非常に重要なイベントであり、誰もが成功したいと考えるイベントである。そのため、自分より活発に活動している人と自分を比較することで、自分を鼓舞したり、有用な情報を手に入れようとするかもしれない。もちろん、このような比較は自己をさらにある価値にさらす可能性もある（Patrick, Neighbors, & Knee, 2004）。そのため、主観的幸福感は損なわれるか、かもしれない。

ここまでの議論は、社会的比較から主観的幸福感への影響について議論したが、逆の因果、つまり、主観的幸福感が社会的比較過程に影響をおよぼすことがあるかもしれない。これまでに、自尊心が低い人や抑うつ的な人は、自尊心が高い人や非抑うつ的な人と比較して自己高揚的な判断を行わないことがわかっている（Taylor & Brown, 1988）。例えば、自尊心が低い人や抑うつの人は、他者と比べて肯定的出来事が自分には起こりにくく、否定的な出来事が起きやすいと考える傾向にある（Pyszczynski, Holt, & Greenberg, 1987）。これらのことを考えると、主観的幸福感が高い人は、低い人と比較して自分に都合の良い社会的比較をするかもしれない。

本研究の目的は、これらの知見を受けて、周囲の他者、より具体的には「同じ大学に通う同年代の他者」のキャリア選択活動を推測することと主観的幸福感との関連を検討することである。特に、周囲の他者のキャリア選択活動の推測は、推測者自身の活動とどれくらい乖離しているか、この乖離と主観的幸福感どのように関連するかを、藤島ら（2007）と同じデータを用いて検討する。

方 法

調査時期および調査対象者

2004年12月、2005年2月、5月、7月に計4回、質問紙による総合調査を実施した。2004年12月1日時点でキャリア選択を考えていた心理学科3年生（当時）89名が調査に協力した。有効回答数は第1回調査が85名（95.5%）、第2回調査が87名（97.8%）、第3回調査が68名（76.4%）、第4回調査が45名（50.6%）であった。平均年齢は、調査開始時の2004年12月で20.8歳（SD=6.4）、調査終了時の2005年7月当時で21.4歳（SD=5.8）であった。2004年12月（3年次12月期）時点で、企業への就職
希望者は64.2%，進学・進路変更希望者は27.2%，資格・公務員試験希望者が7.4%，その他が1.2%であった。

調査手続き

質問紙は，各時点でゼミの教員やクラス主任，研究助手を通じて，留置法で配布し回収を行った。
データの個人別対応を測るために学籍番号を尋ねた。尋ねるにあたり，調査の趣旨を説明し，データの対応のために必要であること，データ対応以外の目的には使用しないことなどを明示した。学籍番号は，調査用紙回収後すぐにランダムに設定された整理番号に置き換えられた。その後のデータは整理番号によって扱われ，対象者のプライバシーが保護されるよう十分注意を払った。

調査項目の概要

調査項目は大別すると，(1)フェイスシート項目，(2)キャリア選択の活動予測に関するもの，(3)キャリア選択の活動実態に関するもの，(4)キャリア選択中の個人差に関するものから構成されていた。

(1)のフェイスシート項目では，年齢，学科，学年，居住形態，進路希望についてたずねた。

(2)のキャリア選択の活動予測に関するものでは，(a)キャリア選択の活動そのものに対して，(b)キャリア選択するということに対して，(c)キャリア選択後のライフスタイルについて予測させた。

(3)のキャリア選択の活動実態に関するものでは，(a)キャリア選択で実際に行った活動，(b)キャリア選択で活用したネットワーク，(c)キャリア選択による心的状態について尋ねた。

(4)キャリア選択中の個人差に関するものでは，認知，感情に関する個人差変数，自己イメージについてたずねた。

(1)，(2)の(a)と(b)，(3)の(a)と(b)については4回全ての調査で回答を求めた。
(2)の(c)，(3)の(c)，(4)に関しては，第1回調査と第3回調査の時点で尋ねた。

今回の分析に用いた変数

まず，上記の(2)キャリア選択の活動予測に関するもののうち，(a)キャリア選択の活動に対するものを分析に用いた。具体的には，各調査時点において「あなたが通う大学の同年齢の学生」が行った就職内定数の推定値を変数として用いた。

また，各調査時点において，11の就職活動に対して「あなたが通う大学の同年齢の学生」が行った就職内定数の推計値を変数として用いた。そこで11の就職活動は，「就職ガイダンスへの参加」「模擬面接・試験の受験」「就職セミナーへの参加」「OGガイダンスへの参加」「就職対策講座への参加」「企業への資料請求」「エントリーシートの作成・送付」「企業による説明会・セミナーへの参加」「企業訪問」「採用試験」「企業の面接」のことを指す。はじめの5つは大学主導の活動であると考えられ，その後の6つは学生主体的に行う活動だと考えられた。

また，藤島ら(2007)と同じく，(3)キャリア選択の活動実態に関する質問も分析対象とした。具体的には，各調査時点において自分自身が獲得した就職内定数を変数として用いた。さらに，(a)のキャリア選択で実際に行った活動に関する変数として，各調査時点における11の活動を行った頻度を取り上げた。この11の活動は，同年代者推測におけるものと同じものであった。さらに，(c)キャリア選択による心的状態に関する変数として，3年次12月期と4年次5月期における主観的幸福感をとりあげた。主観的幸福感は，島井・大竹・宇津木・池見・Lyubomirsky(2004)の日本版主観的幸福感尺度を用いて測定した。

結果

就職内定数の他者推測と自分の実際

各調査時点における同年代学生の内定数推定と調査協力者が獲得した実際の内定数の平均値を表1に示す。実際の内定数に関する詳細な紹介は藤島ら(2007)を参照のこと。これらの平均値に対し4(調査時点：3年次12月期・3年次2月期・4年次5月期・4年次7月期)×(主体：同年代者・自分)の被験者内2要因配置の分散分析を行った。その結果，主体の主効果が認められた(P(1,21)=99.45，p<0.001)。同年代者他者の推定値(mean=2.74)の方が，自分の実際(mean=3.4)よりも高かった。分析時点×主体の交互作用効果

表1 各時期における同年代の学生の内定数

<table>
<thead>
<tr>
<th>年次</th>
<th>同年代の推定値</th>
<th>親の内定数</th>
<th>主体推定値</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>2年次</td>
<td>3.00 (1.38)</td>
<td>2.77 (1.07)</td>
<td>2.73 (1.28)</td>
</tr>
<tr>
<td>3年次</td>
<td>2.77 (1.07)</td>
<td>2.33 (1.07)</td>
<td>3.24 (1.73)</td>
</tr>
<tr>
<td>4年次</td>
<td>2.77 (1.07)</td>
<td>2.45 (1.01)</td>
<td>3.44 (1.88)</td>
</tr>
</tbody>
</table>

(注)カッコ内の数値は標準偏差。
活動頻度の他者推測と自身行動の活動

各活動において、活動頻度の他者推測と活動
協力者の活動の平均値を表2に示す。これに対し、各活動別に4(活動時期：3年次12月期・3年次2月期・4年次5月期・4年次7月期)×
(主体：同年代他者・自身)の被験者内2要因配置
の分散分析を行った。

職員ガイダンスにおいて、主体の主効果が認められた(F(1,33)=31.31, p<0.001)。同年代他者の
推定値(remF=8.02)の方が、自分の実際(remF=2.59)よりも高かった。さらに、調査時期×主体
の交互作用効果も認められた(F(3,99)=3.78, 0.05)。同年代他者の推定値は調査時点の推移
とともに漸減する傾向にあり、調査回答者の
実際は調査時点の推移による変化は見られなかった。この結果、全ての調査時点において同年代
他者の推定値は自分の実際よりも高かったが、そ
の差は調査時点の推移と共に減少していた。調
査時点の主効果は認められなかった(F<1, n.s.)。

面接において、主体の主効果が認められた(F(1,32)=23.73, p<0.001)。同年代他者の推定値
(remF=6.22)の方が、自分の実際(remF=1.31)よ
りも高かった。調査時点の主効果(remF=1.09, n.s)ならびに調査時期×主体の交互作用効果(F<1, n.s)は認められなかった。

就職セミナーにおいて、主体の主効果が認めら
れた(F(1,32)=33.59, p<0.001)。同年代他者の
推定値(remF=9.95)の方が、自分の実際(remF=
1.82)よりも高かった。調査時点の主効果(F<1, n.s)ならびに調査時期×主体の交互作用効果(F<3,96)=2.32, n.s)は認められなかった。

OGガイダンスにおいて、主体の主効果が認められた(F(1,32)=33.59, p<0.001)。同年代他者の
推定値(remF=4.48)の方が、自分の実際(remF=9.20)よりも高かった。調査時点の主効果
(remF=3.62)ならびに調査時期×主体の

<table>
<thead>
<tr>
<th>番号</th>
<th>同年代</th>
<th>自分</th>
<th>同年代</th>
<th>自分</th>
<th>同年代</th>
<th>自分</th>
<th>同年代</th>
<th>自分</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>1</td>
<td>10.32</td>
<td>7.88</td>
<td>10.40</td>
<td>7.72</td>
<td>10.36</td>
<td>7.70</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>2</td>
<td>2.00</td>
<td>2.00</td>
<td>2.00</td>
<td>2.00</td>
<td>2.00</td>
<td>2.00</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>3</td>
<td>6.27</td>
<td>6.88</td>
<td>6.88</td>
<td>7.48</td>
<td>6.88</td>
<td>7.00</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>4</td>
<td>1.03</td>
<td>1.48</td>
<td>1.17</td>
<td>1.61</td>
<td>1.17</td>
<td>1.61</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>5</td>
<td>11.24</td>
<td>11.93</td>
<td>12.02</td>
<td>12.02</td>
<td>12.02</td>
<td>12.02</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>6</td>
<td>6.88</td>
<td>5.95</td>
<td>6.54</td>
<td>5.95</td>
<td>6.54</td>
<td>5.95</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>7</td>
<td>5.45</td>
<td>5.45</td>
<td>5.45</td>
<td>5.45</td>
<td>5.45</td>
<td>5.45</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>8</td>
<td>1.14</td>
<td>1.14</td>
<td>1.14</td>
<td>1.14</td>
<td>1.14</td>
<td>1.14</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
</tbody>
</table>

注）カッコ内は標準偏差。
交互作用効果 ($F(3, 96) = 1.07, ns$) は認められなかった。

就職対策講座に関して、調査時点の主効果が認められた ($F(3, 90) = 3.35, p < 0.05$)。3 年次 12 月期 ($emM=3.07$) よりも 3 年次 12 月期 ($emM=3.68$) に漸増し、4 年次 5 月期 ($emM=2.53$) に減少した。4 年次 7 月期 ($emM=2.55$) は変化が見られなかった。次に、主体の主効果が認められた ($F(1, 30) = 68.48, p < 0.001$)。同年代他者の推定値 ($emM = 4.94$) の方が、自分の実際 ($emM = 9.71$) よりも高かった。さらに調査時点×主体の交互作用効果も認められた ($F(3, 90) = 3.65, p < 0.05$)。調査時点の効果は同年代他者の推測において認められ、自分の実際においてはみられなかった。この結果、全ての調査時点において同年代他者の推測値は自分の実際よりも高かったが、その差は年次変化を境に減少した。

企業への資料請求において、主体の主効果が認められた ($F(1, 32) = 76.29, p < 0.001$)。同年代他者の推定値 ($emM=39.43$) の方が、自分の実際 ($emM=8.97$) より高かった。さらに、調査時点×主体の交互作用効果も認められた ($F(3, 96) = 10.99, p < 0.001$)。同年代他者の推測値は 3 年 12 月期から 3 年 2 月期にかけて減少し、その後一定水準を保つ傾向にあった一方で、調査回答者の実際は調査時点の推移と共有に減少していた。調査時点の主効果は認められなかった ($F(1, ns)$。

エントリーシートの作成・送付において、主体の主効果が認められた ($F(1, 32) = 96.90, p < 0.001$)。同年代他者の推定値 ($emM=32.15$) の方が、自分の実際 ($emM=6.74$) よりも高かった。調査時点×主体の交互作用効果も認められた ($F(3, 96) = 14.88, p < 0.001$)。同年代他者の推測値は調査時点の推移とともに漸減する傾向にある一方で、調査回答者の実際は調査時点の推移と共に漸減する傾向にあった。この結果、全ての調査時点において同年代他者の推測値は自分の実際よりも高かったが、その差は調査時点の推移と共に減少していた。調査時点の主効果は認められなかった ($F(3, 96) = 1.13, ns$)。

企業説明会への参加に関して、調査時点の主効果が認められた ($F(3, 96) = 4.16, p < 0.01$)。3 年次 12 月期 ($emM=13.77$)、3 年次 12 月期 ($emM=16.56$)、4 年次 5 月期 ($emM=19.29$)、4 年次 7 月期 ($emM=19.74$) と漸増する傾向にあった。次に、主体の主効果が認められた ($F(1, 32) = 140.50, p < 0.001$)。同年代他者の推定値 ($emM=27.67$) の方が、自分の実際 ($emM=7.01$) よりも高かった。さらに調査時点×主体の交互作用効果も認められた ($F(3, 96) = 8.52, p < 0.001$)。調査時点の効果は自分の実際において認められ、同年代他者の推測においてはみられなかった。この結果、全ての調査時点において同年代他者の推測値は自己の実際よりも高かったが、その差は調査時点の推移と共に減少した。

企業訪問に関して、主体の主効果が認められた ($F(1, 32) = 52.44, p < 0.001$)。同年代他者の推定値 ($emM=17.64$) の方が、自分の実際 ($emM=1.08$) より高かった。調査時点×主体の交互作用効果も認められた ($F(3, 96) = 11.08, p < 0.001$)。同年代他者の推測値は調査時点の推移に関わらず一定水準を保った一方で、調査回答者の実際は調査時点の推移と共に漸減する傾向にあった。この結果、全ての調査時点において同年代他者の推測値は自分の実際よりも高かったが、その差は調査時点の推移と共に減少していった。調査時点の主効果は認められなかった ($F(1, ns)$。

企業面接に関して、主体の主効果が認められた ($F(1, 32) = 72.45, p < 0.001$)。同年代他者の推定値 ($emM=18.29$) の方が、自分の実際 ($emM=3.67$) よりも高かった。調査時点×主体の交互作用効果も認められた ($F(3, 96) = 6.88, p < 0.001$)。同年代他者の推測値は調査時点の推移に関わらず一定水準を保った一方で、調査回答者の実際は調査時点の推移と共に漸減する傾向にあった。この結果、全ての調査時点において同年代他者の推測値は自分の実際よりも高かったが、その差は調査時点の推移と共に減少していった。調査時点の主効果は認められなかった ($F(1, ns)$。

上記の結果を結果パターンをもとにカテゴリー化すると 4 つのカテゴリーに大別することができます。第 1 は、「模擬面接・試験」「就職セミナー」
「OG ガイダンス」「企業訪問」からなるカテゴリーで、全調査期間を通じて同年齢者の推定値が調査協力者自身の実際を上回るパターンである。典型的な結果として「模擬面接・試験」の結果を図2に示す。第二は、「就職ガイダンス」「就職対策講座」からなるカテゴリーで、調査時期の推移と共に同年齢者の推定値が減衰する一方で、調査協力者自身の実際が減少しないパターンである。典型的な結果として、「就職ガイダンス」の結果を図3に示す。第三は、「企業への資料請求」と「エントリーシート」からなるカテゴリーで、調査時期の推移と共に同年齢者の推定値が減衰する一方で、調査協力者自身の実際が増加するパターンである。典型的な結果として、「エントリーシート」の結果を図4に示す。第四は、「企業説明会」「採用試験」「企業面接」からなるカテゴリーで、調査時期の推移に関わらず同年齢者の推定値は一定水準を保ったが、調査協力者自身の実際が減衰するパターンである。典型的な結果として、「企業説明会」の結果を図5に示す。

主観的幸福感との関連
3年次12月期、4年次5月期に回答を求めた島井ら（2004）の日本版主観的幸福感尺度の尺度得点を各時点で算出した。2時点の得点間には強い正相関（r = 0.64, p < 0.01）が認められている（藤島ら, 2007）。この2時点における主観的幸福感の指標と各時点における同年齢者の内定数推定、同年齢者間の活動推移との間で相関係数を算出した。
3年次12月期の主観的幸福感は、3年次2月期（r = 0.24, p < 0.05）、4年次5月期（r = 0.28, p < 0.05）における同年齢者の内定数推定と正相関を示したが、他の2時点においては相関を示さなかった（|r| ≤ 0.13）。他方、4年次5月期の主観的幸福感には、どの時点の内定数推定とも相関を示さなかった（|r| ≤ 0.22）。
3年次12月期の主観的幸福感と各時期の活動推移との間で相関係数を図3に示す。3年次12月期の主観的幸福感は、3年次12月期における活動の中で、「企業への資料請求（r = -0.30）」「エントリーシート（r = -0.23）」「企業訪問（r = -0.28）」「企業面接（r = -0.22）」との間に負相関を示した。その他の活動との間には相関はみられなかった（|r| ≤ 0.22）。
3年次2月期における活動においては、「企業への資料請求（r = -0.32）」との間にのみ弱い負相関を示し、他の活動との間は相関を示さなかった（|r| ≤ 0.22）。4年次5月期における活動においては、「就職ガイダンス（r = -0.29）」「OGガイダンス（r = -0.25）」「企業説明会・セミナー（r = -0.30）」
「採用試験\((r=-.31)\)」「企業面接\((r=-.25)\)」との間に負相関を示した。その他の活動との間には相関を示さなかった（\(|r|<.25\)）。4年次7月期における活動においては、「就職ガイダンス\((r=-.43)\)」「OGガイダンス\((r=-.30)\)」「企業への資料請求\((r=-.30)\)」「企業面接\((r=-.31)\)」との間に負相関を示した。その他の活動との間には相関を示さなかった（\(|r|<.29\)）。

表3 3年次12月期における主観的幸福感と他者推測との相関

<table>
<thead>
<tr>
<th>3年次12月期</th>
<th>3年次2月期</th>
<th>4年次5月期</th>
<th>3年次7月期</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>就職ガイダンス</td>
<td>0.08</td>
<td>0.19</td>
<td>-0.24</td>
</tr>
<tr>
<td>模擬面接・試験</td>
<td>0.29</td>
<td>0.06</td>
<td>-0.17</td>
</tr>
<tr>
<td>就職セミナー</td>
<td>0.17</td>
<td>0.08</td>
<td>-0.19</td>
</tr>
<tr>
<td>OGガイダンス</td>
<td>0.08</td>
<td>0.02</td>
<td>-0.25</td>
</tr>
<tr>
<td>就職相談講座</td>
<td>0.06</td>
<td>0.06</td>
<td>0.22</td>
</tr>
<tr>
<td>企業への資料請求</td>
<td>0.29</td>
<td>0.31</td>
<td>-0.25</td>
</tr>
<tr>
<td>企業訪問</td>
<td>0.17</td>
<td>0.18</td>
<td>0.23</td>
</tr>
<tr>
<td>採用試験</td>
<td>0.08</td>
<td>0.17</td>
<td>0.21</td>
</tr>
<tr>
<td>企業面接</td>
<td>0.22</td>
<td>0.11</td>
<td>0.33</td>
</tr>
</tbody>
</table>

注）*<.10, **<.05, ***<.01

「同じ大学の同年代の学生」という類似他者との社会的比較が、主観的幸福感とどのように関連していいるかを検討するため、内規と活動頻度に関して同年代他者に対する推測と親友協力者自身の実際との差分をスケルの指標とした。得点が高いほど同年代他者の方が多いことを示す。2時点における主観的幸福感の指標と各時点における内定数のスレ、活動頻度のスレとの間に相関係数を算出した。

3年次12月期の主観的幸福感は、4年5月期における内定数のスレ\((r=-.45, p<.01)\)との間にのみ相関を示し、他の時期における内定数のスレとは相関を示さなかった（\(|r|<.25\)）。4年5月期の主観的幸福感も同様で、4年5月期における内定数のスレ\((r=-.34, p<.05)\)との間にのみ相関を示し、他の時期における内定数のスレとは相関を示さなかった（\(|r|<.18\)）。

3年次12月期の主観的幸福感と各時期の活動頻度のスレとの相関係数を表5に示す。

4年次5月期の主観的幸福感と各時期の活動推測との相関係数を表4に示す。4年次5月期の主観的幸福感に対して、3年次12月期の活動推測中、「企業への資料請求\((r=-.31)\)」「企業面接\((r=-.27)\)」が負相関を示した。他の活動は相関を示さなかった（\(|r|<.24\)）。3年次2月期の活動においては全ての活動が相関を示さなかった（\(|r|<.24\)）。4年次5月期の活動においては、「就職ガイダンス\((r=-.29)\)」「企業説明会・セミナー\((r=-.26)\)」が負相関を示した。他の活動は相関を示さなかった（\(|r|<.24\)）。4年次7月期の活動においては、「就職ガイダンス\((r=-.37)\)」「企業面接\((r=-.34)\)」が負相関を示したが、他の活動は相関を示さなかった（\(|r|<.26\)）。

表4 4年次5月期における主観的幸福感と他者推測との相関

<table>
<thead>
<tr>
<th>3年次12月期</th>
<th>3年次2月期</th>
<th>3年次5月期</th>
<th>3年次7月期</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>就職ガイダンス</td>
<td>0.07</td>
<td>0.06</td>
<td>-0.23*</td>
</tr>
<tr>
<td>模擬面接・試験</td>
<td>0.29</td>
<td>0.12</td>
<td>-0.16</td>
</tr>
<tr>
<td>就職セミナー</td>
<td>0.13</td>
<td>0.08</td>
<td>-0.10</td>
</tr>
<tr>
<td>OGガイダンス</td>
<td>-0.12</td>
<td>-0.07</td>
<td>0.23</td>
</tr>
<tr>
<td>就職相談講座</td>
<td>-0.08</td>
<td>-0.09</td>
<td>0.15</td>
</tr>
<tr>
<td>企業への資料請求</td>
<td>-0.30*</td>
<td>-0.19</td>
<td>-0.13</td>
</tr>
<tr>
<td>企業訪問</td>
<td>0.23</td>
<td>0.16</td>
<td>0.15</td>
</tr>
<tr>
<td>採用試験</td>
<td>0.19</td>
<td>0.08</td>
<td>-0.18</td>
</tr>
<tr>
<td>企業面接</td>
<td>0.27</td>
<td>0.32</td>
<td>0.32</td>
</tr>
</tbody>
</table>

注）*<.10, **<.05, ***<.01

表5 3年次12月期における主観的幸福感と活動頻度のスレとの相関

<table>
<thead>
<tr>
<th>3年次12月期</th>
<th>3年次2月期</th>
<th>4年次5月期</th>
<th>3年次7月期</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>就職ガイダンス</td>
<td>-0.05</td>
<td>0.08</td>
<td>-0.13**</td>
</tr>
<tr>
<td>模擬面接・試験</td>
<td>0.05</td>
<td>0.06</td>
<td>0.16</td>
</tr>
<tr>
<td>就職セミナー</td>
<td>0.07</td>
<td>0.05</td>
<td>-0.29*</td>
</tr>
<tr>
<td>OGガイダンス</td>
<td>-0.17</td>
<td>-0.02</td>
<td>-0.22</td>
</tr>
<tr>
<td>就職相談講座</td>
<td>-0.10</td>
<td>-0.07</td>
<td>-0.27</td>
</tr>
<tr>
<td>企業への資料請求</td>
<td>-0.30**</td>
<td>-0.16</td>
<td>-0.19</td>
</tr>
<tr>
<td>企業訪問</td>
<td>0.28</td>
<td>-0.19</td>
<td>0.25</td>
</tr>
<tr>
<td>採用試験</td>
<td>-0.17</td>
<td>-0.17</td>
<td>-0.30</td>
</tr>
<tr>
<td>企業面接</td>
<td>0.25</td>
<td>0.10</td>
<td>0.34**</td>
</tr>
</tbody>
</table>

注）*<.10, **<.05, ***<.01
活動においては、「就職ガイダンス（r = .38）」「企業への資料請求（r = .36）」との間に負相関を示した。その他の活動との間には相関を示さなかった（|r|≤ .29）。

4年次5月期の主観的幸福感と各時期の活動頻度のズレとの相関係数を表6に示す。4年次5月期の主観的幸福感は、3年次12月期における活動の中で、「企業への資料請求（r = .33）」「企業面接（r = .26）」との間に負相関を示した。その他の活動との間には相関はみられなかった（|r|≤ .22）。3年次2月期における活動との間には、「就職ガイダンス（r = .42）」「模擬面接・試験（r = .29）」「OGガイダンス（r = .25）」「就職対策講座（r = .25）」の「エントレーショント（r = .28）」、「企業説明会・セミナー（r = .26）」「採用試験（r = .27）」「企業面接（r = .33）」との間に負相関を示した。その他の活動との間には相関を示さなかった（|r|≤ .23）。4年次7月期における活動においては、「就職ガイダンス（r = .43）」との間に負相関を示した。その他の活動との間には相関を示さなかった（|r|≤ .30）。

表6 4年次5月期における主観的幸福感と活動頻度のズレとの相関

<table>
<thead>
<tr>
<th>就職ガイダンス</th>
<th>3年次12月期</th>
<th>3年次2月期</th>
<th>4年次2月期</th>
<th>4年次5月期</th>
<th>4年次7月期</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>模擬面接・試験</td>
<td>.049</td>
<td>.119</td>
<td>.423</td>
<td>.429**</td>
<td>.425**</td>
</tr>
<tr>
<td>就職セミナー</td>
<td>.114</td>
<td>.070</td>
<td>.171</td>
<td>.053</td>
<td>.053</td>
</tr>
<tr>
<td>OGガイダンス</td>
<td>.100</td>
<td>.061</td>
<td>.256</td>
<td>.256</td>
<td>.293†</td>
</tr>
<tr>
<td>就職対策講座</td>
<td>.135</td>
<td>.024</td>
<td>.314</td>
<td>.314</td>
<td>.314</td>
</tr>
<tr>
<td>企業への資料請求</td>
<td>.329</td>
<td>.139</td>
<td>.151</td>
<td>.145</td>
<td>.145</td>
</tr>
<tr>
<td>エントレーショント</td>
<td>.218†</td>
<td>.154</td>
<td>.280†</td>
<td>.280†</td>
<td>.153</td>
</tr>
<tr>
<td>企業説明会・セミナー</td>
<td>.154</td>
<td>.261*</td>
<td>.263*</td>
<td>.263*</td>
<td>.001</td>
</tr>
<tr>
<td>企業面接</td>
<td>.182</td>
<td>.201</td>
<td>.220†</td>
<td>.220†</td>
<td>.268</td>
</tr>
<tr>
<td>採用試験</td>
<td>.176</td>
<td>.069</td>
<td>.272*</td>
<td>.272*</td>
<td>.045</td>
</tr>
<tr>
<td>企業訪問</td>
<td>.259</td>
<td>.100</td>
<td>.322**</td>
<td>.322**</td>
<td>.161</td>
</tr>
</tbody>
</table>

考察

就職活動の他者推測と実際

同じ大学に通う同年齢者等の就職活動は自分自身の実際よりも活発に行われていると常に推測されていた。Feestinger(1954) は想定していたとおり、自分について正確に評価したいと考えていたのであれば、周囲に積極的に情報探索し、実際の平均値に近い値が推測できるはずである。本研究の結果はこれに反しており、調査協力者の情報探索が不十分に終わかったか、自分について正確に評価したいと考えていないかの二つの可能性を考えられる。

まず、情報探索が十分に行えなかった可能性について考察する。まず、周囲との直接的伝達による情報探索は可能であったと考えられる。後述する内定数の場合とは異なり、就職活動の実施状況は他にはばれる情報とは考えづらい。周囲の学生に対してたずねることは容易であったと考えられる。その一方で、学生生活を送る中、周囲の他者がリクルートスーツを着て活動しているのをみて、過大推測した可能性も考えられる。リクルートスーツを着ている学生は目立ちやすい。そのため、知覚的に活動頻度を過大に見積もってしまった可能性がある。また、マスメディアによって、就職活動があるが無能である可能性もある。就職活動時期になると、様々な形で学生の就職状況が報告される。ここでも学生の就職活動が顕現の(salient)となり、知覚的に活動頻度を過大に見積もりてしまった可能性も考えられる。

次に、自分について正確に評価したいと考えていなかった可能性、つまり、他の行動の他者判断や感情状態が社会的比較に影響した可能性を考察する。まず、自己高揚動機の影響を考えにくい。「問題」で議論したように、自己高揚動機に基づき社会的比較が行われるのであれば、下方比較が選択されるはずである。つまり、自分より劣る他者に選択的注意を向け -$-$ と考えられるが、本研究の結果とは逆の予測をすることになる。次に、考えられるのが自己向上に動機づけられた可能性である。キャリア選択は一連の目標達成行動であると考えられる。目標達成のために、周囲は自分よりも優れていると考えようとしたかもしれない。もしくは、実際に積極的活動をしている学生に選択的に注意を向けたのかもしれない。第三、就職活動期間はストレスフルな状況であることを考慮すればよいかもしれない。Dewberry & Richardson(1990) は、活動予測は感情状態に関連しており、不安を強く感じている人はそうでない人が比較して悲観的な予測をすることを示した。就職活動というストレスフルな状況が悲観的予測を導いたのかもしれない。

これに対し、第四の可能性として、調査協力者等の主観的幸福感が他者推測を悲観的にしたもの可能性
考えられる。特に就職活動開始時点の主観的幸福感が影響した可能性が考えられる。実際、3年
次12月期の主観的幸福感は、3年次12月期、4年
次5月期における同年代他者の活動頻度推定、な
らびに自他のズレと負相関を示した。つまり、主
観的幸福感が低いほど、同年代他者の活動数を
多く見積もり、自他のズレを大きく見積もる傾
向にあった。Taylor & Brown (1988) が指摘する
ような肯定的幻想がここで生じたのかもしれない。
この考えはもっともらしいが、平均レベルにおい
tても自己卑下的な上方比較が生じていることを上
手く説明できない可能性もある。
調査時期の推移に伴って他者推測が漸減する活
動とそうでない活動が存在した。具体的には、「企
業への資料請求」「エントリーシート」「就職
ガイダンス」「就職対策講座」では漸減がみられ
た。これらは活動初期に行われる活動である点に
特徴がある。そのため、時間推移と共に少なく見積
もりされやすくなったのかもしれない。この四つの
活動のうち、「企業への資料請求」と「エント
リーシート」は、学生が主体的な活動である。
自分が実際に活動に従事するにつれて、現実的な
認識が可能になったのかもしれない。また、3年
次12月期の主観的幸福感と負相関がみられた。
活動初期における調査協力者の感情状態が影響を及
ぼした可能性も考えられる。
その一方で、「企業説明会・セミナー」「採用試
験」「企業面接」「模擬面接・試験」「就職セミナ
ー」「OG ガイダンス」「企業訪問」では他者推測
の変動は見られなかった。前者3つは学生が主体
的に行う活動であるが、活動後期に行われる活動
である点に特徴がある。自分が実際に活動し、体
験する中で現実的な認識が可能になったのかもし
れない。これに対し後者4つは、「企業訪問」を
除き大学が主導する活動であった。大学が一定時
期毎にこれらのイベントを行っていたために、一
定の推測がなされたのかもしれない。「企業訪
問」は、学生が主体的に活動であると考えられ
るが、学生自体がほとんど行っていない事実が
ある(高橋ら, 2006)。そのため、推測の変化がみ
られなかったのかもしれない。
内定数の他者推測と実際
同じ大学に通う同年代の他者に対して、どの時
期においても2〜3の内定を獲得していると推定
していた。3年次12月期においても行われたこの
のような予測は非現実的で、周囲の状況について正
確に把握していなかったことが伺われる。内定の
獲得は、就職活動において（最低限であれば）目標達
成を意味することである。このような情報を直接
なコミュニケーションにより聞き出すのは困難
だったのかもしれない。同時に、進路支援センタ
ーなどの道具的サポート層においても、これらの
情報はプライベシーに関わることなので伝えてく
いのかもしれない。他方で、メディア報道や風評
などにより根拠のない数字が伝達されたのかもし
れない。このような他者推測の情報源について検
討する必要があるだろう。
この結果、調査協力者は、自分よりも同じ大学
に通う同年代の他者がより多くの内定数を獲得す
ると考えていた。就職活動が進展し自身が内
定を獲得するようになるにつれて、この差違は減
少したが、微少なものであった。このような自己
卑下的というべき上方比較はなぜ生じたのだろう
か。基本的には、就職活動における他者推測と同
様の解釈が可能で、情報探索の不十分さと自分に
ついて正確に評価したいと考えていたのかかもしれない。
先述した内定数に関する情報が個人的
情報であることを考慮すると、就職活動に関する
他者推測と比較して情報探索の不十分さの影響が
強いかかもしれない。
主観的幸福感への影響
各調査時期における同年代他者の推測および自
分の実際とのズレは、4年次5月期の主観的幸福
感と一部が負相関を示していた。しかし、3年次
12月期と4年次5月期の主観的幸福感が高い正相
関を示していることを考慮すると、ここでみられ
た負相関は偽相関である可能性がある。このような
制限がある上で積極的に結果を解釈してみると、
就職活動期の初期において他の学生が主体的に活
動していると推測し、自分とのズレを感じるほど、
後の主観的幸福感を下げている点がみられると。
これは、社会的比較によって自分の評価を下げた
結果だと考えられる。
他者推測と自分の実際とのズレの影響は4年次
5月期のものが非常に強く、ほぼ全ての就職活動
においてその影響が認められた。4年次5月期は
学生の就職活動が本格化し、学生主体の活動が飛
躍的に増加する時期であった(藤島ら, 2007)。こ
の時期に、社会的比較によってもたらされる就職
活動に関する自己評価の重要性は極めて高くなっ
たと推察される。そのため、主観的幸福感への影響が大きくなったのだと考えられる。

**注**
1) 進路支援センターは、2003年6月に設立された昭和女子大学のキャリア選択支援を目的とした個別である。本研究とは直接関連しないが、2007年4月からは入学に関する業務を分離し、大学卒業の進路支援に特化した業務を行うに至っている。
2) \( emM \) は推定周辺平均(estimated marginal mean)のことである。

**引用文献**
Gibbons, F. X., Blanton, H., Gerrard, M., Buunk, B., & Eggleston, T. (2000). Does social comparison make a differ-
